**デジタル記憶と忘れられる権利：Wayback Machineが変えたSNSの風景**

「インターネットは忘れない」―この言葉が現実となったのは、一人の男性の理想主義的なビジョンによるものでした。1996年、ブリュースター・ケール氏がInternet Archiveを設立した時、彼の目標は「人類のすべての知識を保存する」ことでした。しかし、この崇高な理念が作り出したWayback Machineは、SNS時代において予想外の影響を与えることになります。

私たちが削除したつもりの投稿、企業が隠したい過去のページ、そして時間とともに消えていくはずだった記録―すべてがWayback Machineの中で静かに保存され続けているのです。この章では、デジタル記憶の特性と、それがSNS社会に与えた根本的な変化について考察していきます。

**1.人間の記憶 vs デジタル記憶：根本的な違い**

まず、私たち人間の記憶とデジタル記憶の決定的な違いを理解する必要があります。

人間の記憶は不完全で、時間とともに変化し、忘却という機能を持っています。心理学者ヘルマン・エビングハウスが発見した「忘却曲線」が示すように、私たちは学習した内容の多くを時間の経過とともに自然に忘れていきます。この忘却は、実は人間の心理的健康にとって重要な機能です。嫌な記憶や過去の失敗を完全に覚え続けることは、私たちの精神にとって大きな負担となるからです。

一方、デジタル記憶は完璧で、劣化せず、忘却しません。コンピュータに保存されたデータは、意図的に削除されない限り、理論上は永久に残り続けます。そして、Wayback Machineはまさにこの「永久保存」を実現してしまったのです。

**2.Wayback Machine：インターネットの永久記憶装置**

Internet Archive創設者のブリュースター・ケール氏とブルース・ギリアット氏によって2001年10月にサンフランシスコで開始されたWayback Machineは、主にウェブコンテンツが変更されたり、ウェブサイトが閉鎖されたりしたときに消失する問題に対処するために作られました。

現在、Wayback Machineには9000億を超えるウェブページが保存されており、これは人類のオンライン活動の歴史そのものと言えます。

Wayback Machineの仕組みは比較的シンプルですが、その影響は計り知れません。自動化されたプログラム（クローラー）がインターネット上のウェブページを定期的に巡回し、その内容をスナップショットとして保存します。この過程で、SNSの投稿、プロフィール情報、画像なども含めて記録されていきます。

重要なのは、この記録作業が投稿者の許可なく、また多くの場合は投稿者が知らないうちに行われることです。あなたがTwitterで投稿した何気ないつぶやき、Instagramで共有した写真、Facebookでの近況報告―これらすべてが、あなたの知らないところでWayback Machineに保存されている可能性があります。

**3.削除されたはずの投稿が蘇る現実**

SNSプラットフォームの多くは「削除」機能を提供しています。ユーザーは自分の投稿を後から削除することで、その内容を「なかったこと」にできると考えがちです。しかし、Wayback Machineの存在により、この削除は完全ではなくなりました。

例えば、あるユーザーがTwitterで不適切な発言をし、後日それを削除したとします。Twitter上からはその投稿は消えますが、Wayback Machineがその投稿をスナップショットとして保存していた場合、その内容は永続的に残り続けます。そして、数年後にその発言が「発掘」され、批判にさらされるということが実際に起こっています。

この現象は「デジタル考古学」と呼ばれることもあります。過去の発言や行動を意図的に探し出し、現在の文脈で判断する行為です。政治家、芸能人、企業経営者など、公的な立場にある人々が特にその標的となりやすく、学生時代のSNS投稿が就職活動や社会人生活に影響を与えるケースも増えています。

**4.プラットフォーム企業 vs アーカイブの攻防**

Wayback Machineの存在は、SNSプラットフォーム企業にとって必ずしも歓迎されるものではありません。企業は自社の利用規約やプライバシーポリシーを頻繁に変更しますが、Wayback Machineはその変更履歴をすべて記録しています。

これにより、企業が過去の約束を破ったり、ユーザーに不利な変更を行ったりした際の証拠が残ることになります。例えば、ある企業が「私たちはユーザーのプライバシーを最優先に考えます」と言っていたにも関わらず、後にデータ収集を拡大した場合、Wayback Machineに保存された過去のプライバシーポリシーがその矛盾を証明してしまいます。

一部のプラットフォーム企業は、robots.txtファイルやその他の技術的手段を用いて、自社のサイトがWayback Machineに保存されることを防ごうとしています。しかし、一度保存された情報を完全に削除することは困難で、この技術的・法的な攻防は現在も続いています。

**5.炎上とキャンセルカルチャーを支える記憶装置**

現代のSNS社会で頻繁に起こる「炎上」現象において、Wayback Machineは重要な役割を果たしています。

炎上の典型的なパターンは以下のようなものです：

1. 何らかのきっかけで過去の発言に注目が集まる

2. 当該の投稿が削除される

3. Wayback Machineから過去のスナップショットが「発掘」される

4. スクリーンショットとして拡散される

5. 文脈を失った状態で批判が拡大する

この過程で特に問題となるのは「文脈の喪失」です。Wayback Machineに保存されるのは、その時点でのページの状態だけであり、その投稿がなされた背景や状況は失われがちです。数年前の冗談が現在の基準で判断されたり、特定のコミュニティ内での会話が一般社会の文脈で解釈されたりすることで、意図しない誤解や批判を生む場合があります。

**6.忘れられる権利 vs 記録する権利：法的な対立**

この状況に対応するため、ヨーロッパでは「忘れられる権利」という概念が法制化されました。

2014年の欧州司法裁判所によるGoogle Spain判決では、検索エンジン事業者は個人の要求に応じて、その人の名前で検索した結果からリンクを削除する責任があるとされました。この判決により、検索結果の表示は個人データの処理にあたり、検索エンジン事業者は特定の状況において個人情報へのリンクを検索結果から削除する責任があることが明確化されました。

しかし、この「忘れられる権利」は、「記録する権利」や「知る権利」との間で複雑な対立を生んでいます。情報の自由な流通を重視するアメリカでは、忘れられる権利に対する反発も強く、Internet Archiveも時として法的圧力にさらされています。

Wayback Machineの運営者であるInternet Archiveは、「人類の知識を保存する」という使命と、個人のプライバシー権の間でバランスを取る難しい立場に置かれています。彼らは削除要請に応じる場合もありますが、歴史的価値や公共の利益を理由に保存を継続する場合もあります。

**7.SNSの歴史を変えたWayback Machineの影響力**

Wayback Machineの存在は、SNS業界全体の風景を根本的に変えました。

第一に、プラットフォーム企業の説明責任が向上しました。企業は過去の発言や約束について、より慎重になる必要が生まれました。利用規約の変更、プライバシーポリシーの修正、公的な発言などが、すべて記録として残ることを前提に行動する必要があります。

第二に、ユーザーの投稿行動にも影響を与えています。特に若い世代は「デジタル・フットプリント」を意識し、将来問題となる可能性のある投稿を避ける傾向が強まっています。これは前章で述べた「自己検閲」の強化とも関連しています。

第三に、ジャーナリズムや研究活動において、Wayback Machineは重要なツールとなりました。記者や研究者は、企業や政治家の過去の発言を検証するためにWayback Machineを活用し、より厳密な事実確認を行えるようになりました。

**8.企業の責任逃れを防ぐアーカイブの力**

Wayback Machineの最も重要な機能の一つは、企業や組織が自分たちの過去を「なかったこと」にすることを防ぐことです。

例えば、ある企業がデータ漏洩事件を起こした際、事後的に自社のセキュリティポリシーを変更して「私たちは常に最高水準のセキュリティを保っていました」と主張したとします。しかし、Wayback Machineに保存された過去のページを確認すれば、実際のセキュリティ対策がどの程度だったかを客観的に検証することができます。

このように、Wayback Machineは企業の透明性と説明責任を向上させる重要な役割を果たしています。特にSNSプラットフォーム企業にとっては、データの取り扱い方針、広告ポリシー、コミュニティガイドラインの変遷がすべて記録されるため、より一貫した政策運営が求められるようになりました。

**9.アーカイブの技術的限界と課題**

しかし、Wayback Machineにも技術的な限界があります。

まず、すべてのウェブページが保存されるわけではありません。動的に生成されるコンテンツや、パスワードで保護されたページ、robots.txtで除外されたページなどは保存されません。また、SNSの多くが採用しているJavaScriptを多用した複雑なページ構造は、完全に再現することが困難な場合があります。

さらに、保存のタイミングも重要な要素です。投稿から保存までの間に削除された内容は、原則として記録されません。ただし、他のサイトにシェアされたり引用されたりした場合は、間接的に保存される可能性があります。

**10.個人ができるデジタル記憶の管理**

このようなデジタル記憶の特性を理解した上で、私たち個人はどのような対策を取ることができるでしょうか。

投稿前の慎重な検討

まず最も重要なのは、投稿する前にその内容が将来にわたって公開されても問題ないかを慎重に考えることです。「今だけの気持ち」で投稿した内容が、数年後の自分にとって不利益をもたらす可能性があることを常に意識する必要があります。

定期的な投稿の見直し

過去の投稿を定期的に見直し、現在の価値観や立場に合わないものは削除することも重要です。ただし、削除してもWayback Machineに保存されている可能性があることも理解しておく必要があります。

プライバシー設定の活用

各SNSプラットフォームのプライバシー設定を適切に利用し、投稿の公開範囲を制限することで、アーカイブされるリスクを軽減できます。ただし、完全に防ぐことは困難であることも理解しておきましょう。

デジタル・リテラシーの向上

最も根本的な対策は、デジタル社会における情報の特性を理解し、適切な判断力を身につけることです。インターネット上の情報は「忘れない」という前提で行動することが重要です。

**11.教育現場での対応**

学校教育においても、デジタル記憶の特性について教える必要性が高まっています。

多くの高校生や大学生は、SNSを日常的に利用していますが、その投稿が長期間にわたって記録される可能性については十分に理解していません。就職活動の際に、企業の人事担当者がSNSをチェックするケースも増えており、学生時代の軽はずみな投稿が将来のキャリアに影響を与える可能性があります。

教育機関では、情報モラル教育の一環として、以下の点について指導することが重要です：

- インターネット上の情報の永続性

- Wayback Machineをはじめとするアーカイブサービスの存在

- デジタル・フットプリントの管理方法

- 批判的思考力の育成

まとめ：記憶と忘却のバランスを求めて

Wayback Machineは、人類の知識保存という崇高な理念から生まれました。しかし、SNS時代において、それは予想外の社会的影響をもたらしています。

私たちは今、「完全に記憶するシステム」と「忘却する権利」の間でバランスを見つける必要に迫られています。完全な記憶は、企業や権力者の責任追及を可能にし、歴史の改ざんを防ぐ重要な機能を持ちます。一方で、個人の成長や社会の寛容さを阻害する可能性もあります。

重要なのは、この新しい現実を理解し、適切に対応していくことです。デジタル記憶の特性を理解し、責任ある情報発信を心がけると同時に、過去の発言に対する寛容さも持つ必要があります。

私たちは、技術の進歩によって生まれた新しい課題に直面していますが、それは同時に、より透明で責任ある社会を作る機会でもあるのです。記憶と忘却、個人のプライバシーと社会の透明性―これらのバランスを取りながら、健全なデジタル社会を築いていくことが、私たち一人ひとりに求められています。

次ページ→「未来」

（参考文献）

Internet Archive. (2024). About Internet Archive. Retrieved from https://archive.org/about/

Kahle, B. (1996). Internet Archive Mission Statement. Internet Archive.

Wayback Machine. (2001). Internet Archive Wayback Machine. Retrieved from https://web.archive.org/

Court of Justice of the European Union. (2014). Google Spain SL, Google Inc. v Agencia Española de Protección de Datos, Mario Costeja González. Case C-131/12.

EUR-Lex. (2019). Right to be forgotten on the Internet. Retrieved from https://eur-lex.europa.eu/legal-content/EN/TXT/?uri=legissum:310401\_1

Nieman Journalism Lab. (2022). After 25 years, Brewster Kahle and the Internet Archive are still working to democratize knowledge. Harvard University.